

2011年3月11日の東日本大震災、記憶に新しい昨年(2014年)8月の広島土砂災害、9月の御嶽山大噴火とあらためて日本は自然災害にさらされている列島であると自覚させられた。

東日本大震災の後、全国の海岸沿いの自治体で、津波の避難場所の見直しが進められている。静岡市袋井市では江戸時代から伝わる「命山(いのちやま)」という人工的に造られた山を避難場所として活用する動きが進められている。

袋井市浅羽の中新田・大野地区には、「命山」と呼ばれる大きな2つの塚がある。今川氏が治めていた戦国時代から江戸時代にかけて新田開発がなされてきたこの地域は昔、入り江が深く入り込んでおり、地震や台風による津波にたびたび襲われてきた。

延宝8年(1680年)8月6日(新暦では9月28日)、強大な台風がこの地域を襲い、高潮と重なった遠州灘からの大津波が発生した。大津波は村全体を飲み込み、大勢の人が亡くなった。城の櫓も流されたという。安政3年(1856年)の台風と並んで江戸時代二大台風と語り継がれるほどの大きな被害が出た。

生き残った村人たちはこの悲劇を繰り返すまいとして避難用に村の中心に高い塚を築いた。その後、村が度々津波に襲われても、この塚のおかげで大勢の命が救われた。村人たちはいつしかその塚を「命山」「助け山」「命塚」と呼ぶようになったという。

(参考:「広報 ふくろい」2006年8月15日発行)

そして、あの東日本大震災の津波災害の教訓から「平成の命山」という「湊命山」(高さ: 海拔10m)が浅羽の湊地区に2013年12月に完成した。先人の知恵を忘れず語り継ぎ実践していこうという地域の人々の取り組みだ。

自然は優しく癒してもくれる。しかし、甘くはない。人間が傲慢になった時、人間に刃(やいば)をつきつけて復讐してくる。このことを肝に銘じておかなければならない。先人たちは自然災害に見舞われたとき自然の恐ろしさを謙虚に学んできた。そうした先人たちの知恵から学ぶことは多い。「命山」もそうした先人たちの知恵、「歴史遺産」だ。私たちの住む身近な地域にもそうしたものがあつた。そうしたものを見つけて学んでいくことが大事だ。(自然保護部の3月環境観察山行で当地を訪れるとのこと。) T. S



中新田命山



大野命山